

氏名（本籍）	タカ 高	ハシ 橋	ハル 治	キ 希	（石川県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第97号				
学位授与年月日	平成14年3月25日				
学位論文等題目	作品 『CONTINUOUS LANDSCAPE』 論文 CONTINUOUS LANDSCAPE - 風景認識と風景表現				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	助教授	（美術学部）	渡辺	好明
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	野口	昌夫
（作品第1副査）	”	教授	（ ” ）	藤幡	正樹
（副査）	”	助教授	（ ” ）	佐藤	時啓
（ ” ）	”	教授	（ ” ）	野田	哲也
（ ” ）	”	”	（ ” ）	六角	鬼丈
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	工藤	晴也

（論文内容の要旨）

本研究は、(1)論文『CONTINUOUS LANDSCAPE』- 風景認識と風景表現 (2)別冊『CONTINUOUS LANDSCAPE』- フィールドワーク (3)作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』 の3つの構成から成る。

(1) 論文『CONTINUOUS LANDSCAPE』- 風景認識と風景表現では、私の作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』の理論的分析を試みる。

現代の風景認識は、「風景（客体）と自己（主体）の関係を客観的に捉える主体」から風景を見ることで、風景を「見えないもの」として捉えている。また風景の知覚は、その初期段階の視覚に、恒常視といった視覚を一定枠に修正する機能と、これまでの経験を混ぜた複合的なものとして、個人的に成立していると考えられている。

こうした「共通風景の非在」に、現代ではさらに、映像の表象機能による風景も無視することができなくなっている。事物の擬似表象を作り出す映像であるが、その風景が事物とあまりに酷似しているために、実在の風景＝（物質風景）と錯覚したり、その幻想的な世界観が、直接記憶風景と結びついたりしている。映像風景はこのように、物質風景と記憶風景の双方に影響を与えているのだ。

美術において風景は重要なテーマとして扱われてきたが、私は風景そのものがもつ性格を客観的に示すのではなく、自己と風景の関係の中に存在する意識こそを、映像を使った作品として表現したいと考えている。

私が風景に対して抱いているのは、定位点のない包括的な風景感覚である。その感覚を説

明するために、風景画におけるフレーミングと遠近法の問題点から考察している。そして、それらの問題点に対して、作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』では、人の注視点の動きに1度立ち戻ることから始めている。

人の視覚は、視界の中の注視点のみがクリアーに視覚され、その他の部分はその直前に得られた注視点の記憶を組み合わせで成立している。そして、人はさらに連続して多方向の対象に注視点を発することで、領域感と定位感覚を得ている。

私の求める風景認識は、本来多方向に向けられている注視点を一点に絞り、縦に繋げたものである。それによって得られる知覚は、自己の定位点を失った広範囲な風景であると考えており、それこそが作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』の基盤になっている。具体的には、ある地点から遠くに一つの注視点を設定して、その注視点に向けてデジタルビデオでズームしながら撮影する。次にその注視点に実際出かけて行き、そこを撮影地点として次の注視点を決め、同じ作業を繰り返して行く。そうして得られた映像の集合体は、注視点を縦に繋いだ無定位感覚の風景である。そうした無定位感覚の風景に私達は身をゆだねることにより、物理的な移動を擬似的に体験するのではなく、注視による無意識下での擬似移動の感覚を得るのである。

こうした手法は(3)作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』において、4つのプロジェクトで具体化されている。東京～大阪、ロンドン～フランス(カレー)、リヒテンシュタイン国境一周、北京市内で行ったそれぞれの作品は、手法こそ同じものであるが、風景はそれ自体が文化・社会の広大なネットワークであり、撮影された風景の集合体から表出してくる要素も様々である。そのため、本論文では各プロジェクトそれぞれについて考察を行った。

また、今回論文と切り離れた参考文献として、別冊(2)『CONTINUOUS LANDSCAPE』-フィールドワークを用意した。(2)『CONTINUOUS LANDSCAPE』-フィールドワークは(3)作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』の映像から見れば、それぞれの風景領域で経験された記憶を文章にしたものである。(3)作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』の鑑賞者がこれを読む時、作家の制作における喜びと苦悩、感情の記憶を想像の中で擬似体験することによって、映像を見る時の記憶風景の代用となるのではないかと考えている。また、この手法は、私をエスノグラフィーにおけるフィールドワーカーのスタンスに置き変えて、「風景と自己」というフィールドを検証ことをさらに可能にすると思われる。

以上、本論文はこうした考えに基づき、(3)作品『CONTINUOUS LANDSCAPE』を言語の側面から支えるものである。